

## 四条金吾殿御返事

弘安二年一〇月二三日 五八歳

先度強敵ととりあひについて御文給ひき。委しく見まいらせ候。さてもさても敵人にねらはれさせ給ひしか。前々の用心といひ、又けなげといひ、又法華經の信心つよき故に難なく存命せさせ給ふ。目出たし目出たし。

夫運きはまりぬれば兵法もいらす。果報つきぬれば所従もしたがはず。所詮運ものこり、果報もひかゆる故なり。ことに法華經の行者をば諸天善神守護すべきよし、囑累品にして誓状をたて給ひ、一切の守護神・諸天の中にも我等が眼に見えて守護し給ふは日月天なり。争でか信をとらざるべき。ことにことに日天の前に摩利支天まします。日天、法華經の行者を守護し給はんに、所従の摩利支天尊すて給ふべしや。序品の時「名月天子、普光天子、宝光天子、四大天王、与其眷属万天子俱」と列座し給ふ。まりし天は万天子の内なるべし。もし内になくば地獄にこそおはしませんずれ。今度の大事は此の天のまぼりに非ずや。彼の天は劍形を貴辺にあたへ、此へ下りぬ。此の日蓮は首題の五字を汝にさづく。法華經受持のものを守護せん事疑ひあるべからず。まりし天も法華經を持ちて一切衆生をたすけ給ふ。「臨兵闘者皆陳列在前」の文も法華經より出でたり。「若説俗間經書治世語言資生業等皆順正法」とは是なり。これにつけてもいよいよ強盛に大信力をいだし給へ。我が運命つきて、諸天守護なしとらむる事あるべからず。將門はつはものゝ名をとり、兵法の大事をきはめたり。されども王命にはまけぬ。はんくわひ・ちやうりやうもよしなし。ただ心こそ大切なれ。いかに日蓮いのり申すとも、不信ならば、ぬれたるほくちに火をうちかくるがごとくなるべし。はげみをなして強盛に信力をいだし給ふべし。すぎし存命不思議とおもはせ給へ。なにの兵法よりも法華經の兵法をもちひ給ふべし。「諸余怨敵皆悉摧滅」の金言むなしかるべからず。兵法劍形の大事も此の妙法より出でたり。ふかく信心をとり給へ。あへて臆病にては叶ふべからず候。恐々謹言。

十月二十三日

日蓮花押

四条金吾殿御返事